

エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

第十一回 センチメンタル・ジャーニー

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

11-1. ベイルート・センチメンタルジャーニー - 中東の戦友を悼む

ベイルート内戦は、1975年から1990年まで15年の長きに渡って続いた。1975年の10月29日にベイルート空港でJALの救援機で日本に帰国する家族をアブダビ行きの機上から見送りアブダビ石油のキャンプに避難した私が、その後の12月上旬と翌年の1月末と3月にベイルートに入ったことは既述した。

1月は、シリアの支援によって、イスラーム勢力が優勢になりつつあった頃である。3月になると、優勢はさらに明確となり、キリスト教徒派が占拠していたホリデイ・イン・ホテルを陥落させた。

この後もイスラーム勢力の攻勢は続いたが、シリアが政策を転換させて、5月に正規軍をレバノンに送って内戦に介入した。これによって、レバノン内戦はキリスト教徒派対イスラーム教徒・PLOからシリア対イスラーム左派・PLOの紛争となり、シリアがPLOの主要な拠点をほぼ制圧した。その後、シリア軍にサウジアラビア軍、スーダン軍なども加わって結成されたアラブ平和維持軍がレバノンに駐留したが、その実体はシリア軍であった。

1979年3月に、エジプトと和平条約を締結してシナイ半島をエジプトに返還しゴラン高原を併合したイスラエルの次の狙いは、レバノン南部に残ってイスラエルにゲリラ的な攻撃を続けていたPLOの潰滅であった。1982年6月のPLO一派による駐英イスラエル大使の狙撃を口実にイスラエルはレバノンに侵攻し、シリア軍やPLO軍を撃破してベイルートを完全に制圧した。事実上の降伏に追い込まれたシリア軍とPLO部隊は9月上旬までにそれぞれシリア、チュニジアや南イエメンなどに撤退し、アラファト議長はその後PLO本部をチュニジアに移転した。

その後、レバノン政府が派遣要請した米国を中心とする国際監視軍の下でレバノンに平和が訪れると期待されたが、政治改革をめぐるキリスト教徒の民兵を中心としたレバノン軍とシーア派民兵との間に再び戦闘が起こった。1983年4月の米国大使館での自爆テロ、10月のシーア派過激派による米海兵隊司令部の襲撃事件によって、1984年2月の米国海兵隊を皮切りに多国籍軍がベイルートから撤退し、イスラエルも同11月の軍本部へのテロ攻撃を受けて、1985年6月までにレバノン南部からも軍を撤退させた。

その後イスラーム教徒の民兵が西ベイルートを制圧したが、統治方針をめぐるスニ

派とシーア・ドルーズ派が対立した。このような状況下で、内戦はさらに細分化されていた。キリスト教徒派もイスラーム教徒派も民兵を増強し、イスラエル侵攻時に撤退していたシリア軍やPLOも多くがレバノンに戻ってきた。互いに攻撃を繰り返し、まるで日本の戦国時代のような様相を呈した。

このように続いていたベイルート内戦が終結したのは、1989年10月の「ターイフ合意」によってであった。アラブ連盟の仲介により、レバノン国会がサウジアラビアのターイフで開かれ、そこで、「国民和解憲章案」が合意された。骨子は、国会の議席のキリスト教徒とイスラーム教徒間の割り当てを均等にする（従来は6対4）、大統領の権限縮小と首相・国会議員の権限拡大、政府・軍の宗派別配分の禁止、民兵組織の解体、シリアが最大2年間は新政府の治安維持を助ける、イスラエルは南レバノンから撤退するなどであった。このターイフ合意は1990年8月の議会で承認され、勝者もなく敗者もなく、ただただレバノン全土を荒廃に押しやった内戦はここで終結した。

私はその10数年間、ベイルート情勢を気にしながらアラビア半島に係わる仕事をしてきたのだが、ベイルート訪問の機会には恵まれなかった。

オマーンでの2度目の勤務を終えて帰国していた1999年10月に、私にベイルートを訪れる機会が巡ってきた。元商社ベイルート駐在員と元丸善石油の同僚と私の3人でベイルートへセンチメンタル・ジャーニーをしようという話が持ち上がった。元商社駐在員は、内戦時に傷痍軍人さながらの姿でベイルートの町を彷徨していた、日商岩井のあの矢沢であった（第五回参照）。ベイルート脱出以来23年ぶりのベイルート訪問。

3人が搭乗したマレーシア航空機は、朝に成田を発ってクアランプールへ。私たちはその日の夕刻にマレーシアで手広く事業を展開していた日本人の知人と夕食を共にし、夜中に同航空のベイルート行きの直行便に乗り込んだ。

翌朝同機は南部インドをかすめてアラビア海まで飛行し、オマーン南部の上空に達し、そこからベイルートまでアラビア半島を一路北上した。アラビア半島全土を南北に縦断するのは初めての体験であった。

このアラビア半島に、セム人の源流があるといわれている。紀元前5000年頃から灌漑農業を始め紀元前3500年頃にメソポタミアで人類最古の都市文明を築き上げたシュメール人と混交して初のセム語系の帝国となったアッカド帝国、その後のバビロニア王朝やアッシリア帝国、アモリ王朝、ダビデ王・ソロモン王で有名なヘブライ王国、またペトラで有名なナバタイ王国などを打ち立てたのは、セム人であった。いまのアラビア人の祖に当たる人々である。

アラビア半島で人口が限界まで増えると、溢れ出て北に向かう移動を繰り返したという。北方に延びる道には、エジプトに至る道とメソポタミアに至る道があったと思われる。人々は家族を連れて、徒歩やラクダに乗ってアラビア半島からこの北への限られた道を進んだのだろう。中には、途中の砂漠でベドウィンとして住み着いた人もいただろう。東の道を北へ進んだ人々は、砂漠の先に見えてきたメソポタミアの緑の樹々を目指し、その後北

上した人々はシリアや雪を抱くレバノンの山々を目指し、さらに「乳と蜜の流れる土地」であるパレスチナへ歩みを進めた。そこからさらにヨルダンに進出した人々もいた。

570年頃にサウジアラビアのマッカで由緒あるクライシュ族のハーシム家に生まれたムハンマドは6歳の時に孤児となり、祖父と叔父に育てられ、成人して叔父の下で商人となった。25歳の時にハディースと結婚して2男4女を設け、幸福な家庭を築いた。40歳になった610年にマッカ郊外のヒラー山で大天使ガブリエルから神の啓示を伝えられ、ムハンマドはこの神からのメッセージを預言者として人々に伝えてゆくことを決意した。イスラームの始まりであった。

当時のマッカの人々は多神教でムハンマドやイスラームの信者たちは迫害を受け、622年にマディーナに移住した。その後ムハンマドたちはジハードの旗の下で多神教徒たちと戦ってこれを打ち破り、630年にはマッカに戻ってカーバ神殿をイスラームの聖地と定めた。その後、アラビア半島全土にイスラームが広まった。

632年にムハンマドが亡くなると、アブー・バクルが初代カリフに選ばれ、「正統カリフ」の時代が始まる。イスラームの共同体は国家として整備され、ジハードの旗の下その勢力をシリア、エジプト、イランにまで広げて行った。再び、人々はアラビア半島から北を目指して大規模な移動をしたのである。いわゆるアラブの大征服である。その後、ダマスカスを拠点に成立したウマイヤ朝は北西アフリカ、ヨーロッパのイベリア半島、インダス川流域、中央アジアにまで支配を拡張、アラブ帝国を樹立した。

マレーシア航空機は、オマーン、アラブ首長国連邦、サウジアラビアと、まさに古の人々が徒歩やラクダで北上して行ったルート、7世紀にイスラーム教徒の軍勢がラクダや馬に乗って意気高らかに進んでいったルートの上空を飛んだ。眼下に広がって見える景色は、この何千年間もの歴史を偲ばせるものであった。

私たちはレバノン山脈を越え、早朝にベイルートに到着した。荒廃ぶりを心配していたベイルート空港は、一新されていた。降りた乗客もかなり多かった。ただ、私はアラブ色が強くなったという感じがした。アラブ人と湾岸に入るアジア系の出稼ぎ人の姿が目立ち、欧米人がほとんどいない。昔の西洋的な華やかさは失われていた。アラブのローカル空港という感じであった。

ベイルート随一の繁華街ハムラ通りを脇道に入ってすぐのところの予約したカバリエ・ホテルへ向かう途中、私は久しぶりに見る町の様子に目を凝らしていた。海岸べりのラオシェの手前から、近代的な高速道路が出来ていたのには驚いた。この道路も空港もサウジアラビアの援助で作られたものだと運転手から聞き、ベイルートで内戦終結の仲介を主導したサウジアラビアのプレゼンスが大きくなっているのを感じた。

昼食後、私たちは、アルファベットの元となった世界最古のフェニキア文字が刻まれた石棺が保存されているレバノン国立博物館を訪ねた。道路を隔てた博物館前の武器博物館と思しき建物に向かって矢沢がビデオを構えると、そこは軍事裁判所になっており、撮影禁止の建物となっていた。間の悪いことに、目の前で車に乗ろうとしていた軍のお偉い

さんに見つかり、たちまちご用となった。道路脇でさんざん尋問されてから幸い無罪放免となったが、この一件でベイルートに往時の平和は戻っておらず、軍事的な緊張がまだ続いていることを思い知らされた。

内戦中も営業を続けてきた日本料理店「東京レストラン」でその夜食事をした。久しぶりに再会した店主の伴ツユからは、「商売は苦しい」、「金持ちのアラブ人がベイルートの山荘を買いまくっているし、夏も避暑に大勢の人が押し寄せた」、「だが、ベイルートの本当の再建は海外の金持ちのレバノン人が国に戻るかどうかにかかっている。彼らは、まだ祖国レバノンの情勢を100%信用していない」、「華やかなハマラ通りは裏通りになってしまった」、「昔は社交場であったハマラ通りのMODCAレストランが、いまはハマラで働く人のための食堂に成り下がってしまった」というような話を聞いた。

ベイルートでは、フェニキア人発祥の地のビブロスやレバノン杉の保護区があるブシャール村も見回った。交通手段はアメ車のハイヤー、乗り放題で一日3人で80ドルという安さだった。レバノン杉の生えている一角の路上に並んでいる土産物屋の親父さんたちが非常に親日的で、みんな「日本はこの森の保存のために金を出してくれた」とロ々に言ってくれた。驚きだった。私たちがこう言って貰えたのは、国際日本文化センターの安田喜憲教授の呼びかけに応じた広島大学中根周歩教授の「レバノン杉を守ろう」との呼びかけに私財をつぎ込んで応じたイービーエス興産の戎晃司社長のお陰だと後で知った。感謝である。

この村はベイルート市内から北へ車で2時間半の距離の標高1,800メートルの高地にあり、道も険しいものであった。24年前に、あの戦乱の最中によくこんな所まで、私が妻や子供まで連れてきたものだと今さらながら反省させられた。無事だったから良かったものの、無謀なことであった。

到着した3日目の昼に、私たちはシャンマ前駐日レバノン大使から親戚の集まりに招待された。場所はベイルートから北東85キロの古代遺跡のあるパールベック近くのザール。大使は豪邸を新築中とのことで、場所は姪一家の素晴らしいマンション。大使夫妻、ベイルート・アメリカン大学法学部在学中のお嬢さん、大使の姉妹など十数人が集まってくれ、本場のレバノン料理をご馳走になった。

これより4ヶ月前、その年の6月に私は、国際連合工業開発機関（UNIDO）東京投資/工業技術移転事務所と駐日レバノン大使館との共催で開かれた「レバノン投資セミナー」での講師を依頼された。私の演題は「レバノンでのビジネス体験ー1970年代」であった。当時のレバノン情勢を話した後で、私はレバノン人が料理の天才であること、レバノン人ジョージが約束を守って私の荷物を日本とアブダビに無事に送ってくれたこと、レバノン人に恩義を感じていること、それに戦時下のベイルートの夜の感動的な送別会の話を見せてもらった。

主催者であるレバノン大使が私の話で大感激をして、講演の数日後に「貴男の講演原稿を貰いたい」、「自分は近く帰国するが、ぜひともレバノンにきて欲しい。その時にはわが

家にも寄ってもらいたい」と自宅にまで電話をいただいていた。私も大感激。この集いは、レバノン大使からの招待が実現したものであった。光栄なことであった。

ベイルートからバールベック遺跡へ行く道すがら、シリア軍が戦車を置いて辺りを警戒している様子が散見された。往時の平和なベイルートには見られなかった光景であった。また、バールベック遺跡のある村への入口では、イスラーム過激派のアマルが独自に検問所を設けて警戒に当たっていた。レバノン政府軍の治安維持力のひ弱さを垣間見るようであった。

24年前に足繁く通った日本料理店の「美智子」のママ美智子がバールベック遺跡近くの墓に埋葬されていると聞いていたが、墓を探し当てることが出来ずに花を捧げられなかったのは残念であった。異国に眠る美智子にとってレバノンが第二の故郷だったのであろう。合掌。

レバノンに行ったついでに、私たちは5日間かけてシリア国内も巡ることにした。訪れるところは、ダマスカス、パルミラ、ハマス、アレッポ、ラタキアなどなど。ベイルートを出発する時に街で花束を買い、車に積み込んだ。ダマスカスに行く途中で、元日商岩井社員の東郷が亡くなった事故現場に捧げるためであった。

東郷は同行の矢沢とは会社の同僚で、私が1973年にテヘランからアラビア半島を経由して初めてベイルートに入った時に応対してもらった人。私は、「東郷が駐在中に3人子供がいた日本人の奥さんと離婚して、アルメニア人女性と結婚。その後日商岩井を退社して、内戦で邦人ほとんどが引き揚げたベイルートに残り、自営で商売をしながら生計を立てていた。商用で訪れたダマスカスからベイルートに帰る途中大雪となり、ダマスカス峠で雪に埋もれた車の中で亡くなった」ことを聞いていた。

当時のベイルートには、日本人の奥さんがいるのにアルメニア人女性と関係してしまった日本人駐在員がもう一人いた。大手船会社の駐在員であったが、その女性を振って東京本社に戻り、その後栄進したと聞いた。一方、東郷は日本人の奥さんと離婚して現地女性との結婚を選び、そして雪の中で死んだ。

東郷の実兄もベイルート内戦で命を落としている。リビエラ・ホテルのフロント係をしていた実兄は、内戦のさ中の帰宅途中に民兵の誰かを振りきって車を走らせ、後ろから撃たれて亡くなっていた。「ベイルートで東郷兄弟死す」という出来事は、私の心に長く残っていた。

国境でレバノン側の税関で出国手続きを終え、シリア側税関で入国手続きを済まして少し走った下り坂の辺りが東郷の遭難現場と見当をつけた。私たちはそこで車から降り、花束を捧げて手を合わせた。3人だけの、ダマスカス峠での中東の戦友への追悼であった。

11-2. シリア周遊の旅 - 中東で洪水を体験

翌朝のシリアの首都ダマスカスでは、アザーン（イスラームのお祈りへの呼びかけ）の

声が聞こえない。ホテルで訊いてみると、「ホテルがある市の中心街では、外国人観光客を煩わせないため、政府の指示でアザーンの音を小さくしている」ということであった。強硬派で知られた当時のアサド大統領も、観光客には気を遣っていることを知った。

市内で1人乗りの小型バスを運転手付きで一日85ドルで手配し、私たちはシリア周遊の旅にでた。運転手の名はアハマドという人の良さそうなシリア人青年。初日は、ダマスカスからパルミラへ。

途中、ベドウィンが経営するドライブ・インで休息。ダマスカスからパルミラまでの約230キロは沙漠の中の道で、ここ以外に休む所がないので、店は大繁盛。そこでは、ベドウィンの手芸品や化石などの土産品、それに飲み物などを売っていた。彼らが現金収入を稼ぐには格好の場所で、親父や息子が総動員で働いていた。

カフェの裏手のトイレも大賑わい。そこに入るにも使用料を払わなければならない仕組み。ベドウィンもやるもんだ。これでまた稼げる。入り口には、"Cleanliness is next to godliness"（清潔は、敬神に次ぐ）という文言が貼ってあった。アラブ人はお祈り前に身体を清め、食事の後先に手洗いをし、トイレでは水で洗浄するなど清潔であることを旨とする人たちだと再確認した。

やがて、道の両側に売店が並ぶ砂埃の街中に入った。左側の建物の切れ目を通して、石柱の長い列があちらこちらに浮かんでいるのが見えた。パルミラの遺跡だ！突き当りを左折して遺跡に沿う道を車が遺跡の入り口に近づくにつれて、右手に神殿らしいものが目に入ってきた。広大な遺跡群である。沙漠の中に忽然と現れたのである。それまでペルセポリス、ペトラと、中東の3P遺跡の2つを見ている私には、「パルミラが No.1」と直感した。衝撃的なパルミラとの出会いであった。

ガイドを雇って隅から隅まで入念に見学した。ジュピター宮殿は210×200メートルという広大な建物。ローマに反逆して捕らえられてローマで首を刎ねられたという絶世の美女、女王ゼノビアの浴室跡は哀れであった。案内人は、自称考古学者でダマスカス大の教授だという。彼の各国の観光客に対する評価は、「ドイツ人は難しい。フランス人はそれほどではない。日本人はおとなしい」というものだった。

パルミラを見学した後、アラビアのロレンスが「世界で一番美しい城」と称した世界遺産のクラック・デ・シュバリエ城に移動した。着いたのは午後4時過ぎで閉館時間を過ぎていたが、「1万キロも離れた日本からわざわざ来た」とアピールして、なんとか入れて貰った。見学後にシリア第三の都市ハマに戻り、その夜は市内の小さなホテルに泊まった。ハマの人口は60万人、ダマスカスが3百万人、アレッポが百万人と聞いた。

ホテルの若旦那の話が面白かった。このホテルはサウジアラビアのベドウィンであった彼の父親が一代で作り上げたとのこと。若旦那はホテル経営だけではなく、ビルの建築やUAEからの車の輸出入にも仕事を広げた。70平方キロのぶどう畑と50平方キロの綿花畑、それに野菜や果樹も所有。父親は読み書きができなかったが、一人息子の若旦那をダマスカス大学を卒業させ、3人の娘たちにも教育を受けさせ、なかには博士も薬剤師も

いる。彼女たちは、結婚して湾岸で働いている。父親には妻が7人、子供が60人いることなど。

ハマはダマスカスやアレッポと違って、ベドウィン色が残っている町であった。イスラームの信仰も厚い。「神を信じる心はベドウィンが一番強い」、「アメリカとイギリスは悪い国、日本は良い国」との話もあった。午前中はハマの市内見物。思ってもみなかった落ち着いた良い町であった。それに、オロンテス川にかかるいくつもの巨大な水車は見ものであった。さすが世界遺産だけのことはある。そこからまっすぐにアレッポに向かった。

ハマからアレッポにかけては緑豊かな草原地帯。この辺りでは、リンゴとバナナが栽培されると聞いた。農業用水は地下水を汲み上げ、スプリンクラーで散布しているようであったが、これに従事しているのは、おそらくベドウィンたちであろう。彼らの生活も定住へとその姿を変えていた。

昼前にアレッポに到着して、アラビアのロレンスも投宿したという「バロン・ホテル」にチェックインをした。ホテルは1910年代に建てられたままの姿であり、階段なども磨り減っていかにも古そうだが、それだけに歴史の重みはずしりと肩にのしかかった。

フロントで主任らしき女性が「部屋は一部屋が1階、2部屋が3階よ。案内して」と若い女性に鍵を渡した。そして、私を指差して「この人は、1階よ」という。「どうして？」と私が聞くと、「あなたが一番お年寄りなもの」というのだ。つまり、エレベーターのないこの古いホテルで3階までこの老人を歩かせるのは、気の毒という配慮からの部屋割りであったようだ。

「矢沢と川合はまだ60歳を越えたばかり、私はそれより5歳年上である。他人には年齢の割に若いと言われている私だが、「5歳の年齢差はやはり大きいのか」とやや愕然とした。その後、2回ほど彼女に「俺は年寄りだからね」というと、「そんなことはない。貴男はまだ若い」と真顔で言ってくれたが、いじけてしまった私の心には彼女のお世辞は届かなかった。

午後、世界遺産に登録されているアレッポの旧市街にあるキャラバンサライ（隊商宿）やスーク、アレッポ城の見学にでかけた。

最初のキャラバンサライは、17世紀に栄えたハーン・アル・ワジール。ラクダ、馬、ロバなどを繋いだ広い中庭や各地からやってきた商人たちが取引をし宿泊した2階建ての建物を見て、往時を偲んだ。

次に、隣接するかつては世界最大級を誇っていたスークを訪ねた。オリーブ石鹸をお土産にいくつか買う。矢沢は「泡の石鹸を使っているから、こういうの固形のもの駄目」という。アレッポは石鹸の発祥の地として知られ、数千年の伝統のあるオリーブ石鹸は、中東のみならず世界的にも有名である。自分がアレッポではぜひともオリーブ石鹸を買おうと思っていたので、「こんなに有名なものを買わない人もいるのか」と思った記憶がある。

最後にお目当てのアレッポ城を訪ねた。息を切らせながら石が敷き詰められた坂道を登った。高さ50メートルほどの小高い丘の上に建っていた。城砦の基礎ができたのは十字

軍に備えるための11世紀末、13世紀のアイユーブ朝時代にほぼ現在の姿になったと言われている。周囲約2.5キロの壮大な城は、道も場内も大勢の人で賑わっていた。そこからシリア第2の都市であるアレッポの素晴らしい街並みが一望できた。アレッポの町全体が1986年にユネスコ世界遺産に登録されている。

翌日は、ラタキア近くの、アラブを十字軍から守ったサラーフディーン城を見て、それから浜辺で久しぶりに魚を食べてからダマスカスに戻ろうという計画。サラーフディーン城まではたいへんなロング・ドライブであった。朝8時にアレッポを出て、ハマ・ホムスと一路南下、そこから右折して今度は海岸通りをタルトウス、アサド大統領の出身地近くのパニヤス、そしてラタキア手前を右折して山側に入って、城に着いたのは12時20分。アレッポから400キロぐらいは走った計算になる。

サラーフディーン城は断崖絶壁の上に聳え立つ難攻不落の城に見えたが、サラーフディーン軍のゲリラ活動拠点だったと聞いた。城は、荒れているという感じがした。フランス人やその他西欧人の観光客が何組かいたが、城内でダマスカス大でアラビア語を学ぶ中国人の男女学生数人にも会った。外交官の卵たちであった。

見物後に城を真ん前に望む瀟洒なレストランで運転手のアハマドを入れて昼食をとる。もちろん、魚を注文。イサキらしい魚の丸焼きが運ばれてくる。なかなかいける。食事中に強い雨が降り、雷鳴が轟いてレストランも停電した。

その後、一路ダマスカスへ。夕方までには着けると思いきや、途中思いもかけないことが起った。

タルトウスからホムスを通ってダマスカスへの高速道路に入った頃にも遠くに雷鳴が轟いていた。稲妻も光りだした。気がつくや、道路の両側を濁流が流れている。豪雨でワジが氾濫していたのである。そのうちに車はストップ。あふれた水は道路上にも達し、車のタイヤを洗い始めた。

中東生活が長い矢沢でも、このような光景を見るのは初めてとのこと。車を降りて数珠繋ぎに停まっていた何台もの車の脇をすり抜けて、前の方まで行って状況を観察した。無事にダマスカスへ着けばよいのだが、最悪の場合は私たちも車ごと流されてしまうという危険性もあった。

しばらくして停まっていた車列が前に進み出したが、のろのろと走っては停まり、停まっては走るという状況。遠くにパトカーのサイレンも聞こえる。警察も出動しているようだ。途中濁流の中のあちこちに横転している車、道路から遠くに流されている車などが見える。道路脇のワジには、逆巻く濁流が流れ続けていた。小一時間もこんなスリルのある状況が続いた後、ようやく車は水の難所を抜けて走り出し、午後7時過ぎに無事にダマスカスのホテルに戻ることができた。その日は、優に700キロは走った。

私は、オマーンで洪水を何回か経験していた。マスカットの市内で、水浸しになった道路を昼でもヘッドライトをつけてノロノロと運転をした。郊外のワジでは、水の中に車が入る。ブレーキを踏む。車がスーッと横に滑る。というよりは車が水に浮いて流された。

その時に車が衝突したり、車の流出事故もありうる。怖かった。

同行の2人にとっては、ワジの氾濫は初体験。とんだハプニングであった。

11-3. 最後のベイルート訪問 - 懐かしのわが家と懐かしの味

翌日、朝食を終えた私はシリアからヨルダンに向かう2人と別れて、7時過ぎにシリア人運転手とともにホテルを後にして、単身ベイルートに向かった。

途中、運転手が、ダマスカス郊外に広がるサウジアラビアやクウェート人の別荘地帯のこと、ダマスカス・ベイルート街道とベイルートの空港から市内に通じる道がサウジアラビアの資金で出来たこと、レバノンにはシリアの支配下にあること、などを説明してくれた。

11時前に、ベイルートのバスターミナルに到着。シリアのタクシーはここまでしか入れないので、ここでレバノンのタクシーに乗り換えて、カバリエ・ホテルに向かった。

ホテルにチェックインした後にかつてのわが家を訪れて、写真を撮りまくった。建物には弾丸の跡もなければ、壊された形跡もまったくない。変わったことと言えば、古くなったことと入り口のガラス戸に鉄格子がつけられたことだけ。当日は休日で門番も見当たらず、中に入ることは出来なかった。

少し待っていると中年の女性が帰宅したので、「自分は24年前このマンションに住んでいた日本人だが、ジョージという運送会社社長のレバノン人が4階に住んでいないか」を聞いたが、「自分はヨルダンからここを訪ねて来た者で、分からない」とのことだった。しばらくして中から出てきた男子高校生にも訊いたが、同じような答えであり、私は諦めてかつてのわが家を立ち去った。

それから、歩いて懐かしの「イタリアン・スパゲッティ」に向かい、海鮮スパゲッティとオツ・ブーコ（仔牛すね肉の煮込みミラノ風）の昼食を取った。2人前の食事だが、半分ずつを味わう。ボンゴレがなかったので、代わって海鮮スパゲッティになったが、24年ぶりの味であった。デザートにカッサータ（ドライフルーツなどをチーズ混ぜ、冷凍して固めたスイーツ）を頼んだがこれもなかったので、バニラ・アイスクリームで我慢した。

思い出の味を楽しんだ後に、サンジョルジュのプール・サイド、フェニシアホテル付近、昔長期滞在していたエクセシオール・ホテル付近をぶらつく。昔の飲み屋街の雰囲気は、かすかにしか残っていなかった。

夜、「東京レストラン」に出向いたが、8時半だというのにハマラ通りは人通りがまばら。不気味なので足早にホテルに戻った。

翌朝、11時30分にタクシーでホテルを出て、再度「東京レストラン」へ行って、オーナーの伴ツユに挨拶をして名残を惜しんだ。それから空港に向かい、15時ベイルート発のマレーシア航空に搭乗。クアランプールを経由して成田へ到着し、無事に帰国した。

11-4. アブダビとオマーン訪問 - UAE 大学日本学部創設とオマーンの石油開発

2000年4月に入ると、ジャパン石油開発副社長の岩井から、UAE大学とオマーン石油省に行ってもらえないかとの電話が入った。

前者は、UAE大学を訪ねて副学長の来日についての打ち合わせと、UAE大学への日本人留学生の派遣や日本学部設置の可能性についての情報交換の依頼。後者は、オマーンの石油大臣に会って、オマーンの石油開発への日本の参加の可能性を探ってくれないかとのことであった。

両者とも私とは旧知の間柄。そこで、ジャパン石油開発の技術者の吉野と5月20日から28日までアブダビとオマーンに出張した。

深夜にアブダビ空港に着いて、アブダビの街に入る時に「ここがアブダビ？マレーシアだといわれても誰も疑わないだろう」と思うほど、空港から街への道が緑の樹々に覆われていた。しかも、それを照らし出す煌々たる街灯の灯りにも驚いた。翌日アブダビからUAE大学のあるアラインに行く道も、その後アラインからドバイに行った時の道も、緑の樹々に覆われ、車中から砂漠が見えないのには驚愕した。以前は、これらの道路は砂また砂の中の一本道、左右に赤い砂丘、黄色い砂丘などの景観が楽しめたのに、車から見えるのは風にそよぐ緑の樹々のみ、信じられない景色であった。

初代UAE大統領を務めたザイド・アブダビ首長は1970年代から緑化に力を入れていたが、これらはその成果であった。

5月22日にUAE大学に副学長を訪問し、UAE大学への日本人留学生について、日本側の大学に当たったところ大いに可能性があるかと伝えた。UAE大学での日本学部の設置については、「もう少し待つように。検討中」との返事だった。最初に会った時から日本に対して親近感を持っているようだったが、さらにその感情を深めているように思え、「日本は大事な国なので、いつか子供たちにも日本を見せたい」という発言もあった。

その後、UAE大での日本学部創設の話は立ち消えとなった。理由は判然としなかった。私が2年前にUAE大学で行った講義(第十回参照)は好評だった筈なので、「創設後には、また何らかのお手伝いできれば」とも考えていたが、残念な結果となった。

副学長に会った後、UAE大学の **Zayed Center for Heritage and History** を訪ね、アブダビ人でエクセター大学で博士号をとった所長のアル・ナブーダ博士と旧交を温めた同所長から、「日本の研究機関と共同研究をしたい。良い相手を紹介して欲しい」との依頼を受けた。

アラインからアブダビに戻って表敬訪問をした旧知のアブダビ文化財団ムサッベ学術・文化課長からは、「2001年のアブダビにおける日本週間への協力やニイガタ首長国連邦との交流については、今後とも協力をして欲しい。湾岸地域は今まで西欧と付き合いってきたが、少なくともアジアとの交流をその半分までには持って行くべきである。中でも、日本との交流は重要である」との話があった。

その後オマーンに移動し、オマーンへの石油開発への参加についての情報を得るべく、ルムヒ石油大臣を訪問した。大臣は、「オマーンにはまだオープン鉱区がある。それへの参加を歓迎する。公開入札の形は取らないので、何時でも来てくれたら、情報提供や話し合いに応じる」と私たちの訪問を歓迎し、自らが当該鉱区の図面を持ち出して有望な鉱区についての説明を受けた。

次に、日本の石油会社のPDO（オマーン石油会開発会社）への参加の可能性について尋ねた。これに対しては、「PDO自身への参加については無理だろう。PDOにはオマーン政府以外にも何社か株主がおり、それらがOKしない」との説明であった。面談は私との個人的な関係に基づいた友好的な雰囲気の中で行われ、大臣の話はたいへんに率直なものであった。

大臣は、その優秀さから勤務していたPDOの奨学金で欧米の大学に派遣されて博士号を取得した人である。帰国後にスルタン・カブース大で助教授を務めていた1997年に、それまで長い間石油大臣を務めた大臣に代わって、石油大臣に抜擢された。その後、OPECプラスの有力メンバーとしてのオマーンの石油政策のかじ取りを、2022年に退くまで担うこととなった。

私は、石油大臣との面談の前に、旧知の現地の石油コントラクター社の社長を訪ねた。1993年に商工省主宰のオマーン人経営者向けセミナーと一緒に講義を行った仲であったが、社長には当時の私の話しがとくに参考になったようで、その後も懇意にしてくれていた。

同社の事業内容は、掘削・ワークオーバー（採掘井の坑井内の故障を直したり、産出量を増大させるために行う作業）と油井サービス・油井テストと生産サービス・掘削関連液体処理・火災処理と油井閉鎖・関連コンサルタント業務など多岐に亘る。中東最大の独立系コントラクター。当時の従業員数は約1600名。オマーン国内では、PDOの仕事の75%を請け負い、海外でも、ハンガリー、シリア、中国、インドネシアなど8ヶ国で活動中であった。短期間に大きな会社になっていたのには驚いた。

社長は1982年に会社を設立してから20年足らずで、会社を国際的な会社に成長させていた。同社はオマーンの油田の特殊性を熟知しており、オマーンの油田開発では技術的にも経済的にももっとも競争力のある会社であった。同氏は、PDOでは石油大臣の先輩に当たる。

私は帰国後にジャパン石油開発の岩井に、「石油大臣が提案してくれた鉱区開発にこの友人の会社と組んで参加せよ。その流れでPDOの利権が切れる2012年に、PDO社の鉱区にこの会社となだれ込む」という提案を行ったが、後日同行した吉野から、「ジャパン石油開発には、この話に乗る余裕がない。遠藤さんの線で、なんとか別の会社に話を持って行くことを検討してください」という電話があった。

上述の石油コントラクター社長が2001暮れに来日し、「私に会いたい」というので2人で夕食を共にした。用件は、「石油資源開発（JAPEX）の子会社のジャベックス・オ

マーンが操業しているダリール油田の利権が入札にかかっている。わが社も入札に参加したい。出資してくれる日本の会社を探している。心当たりはないか」という相談であった。

ジャペックス・オマーンは、オマーンから石油利権を獲得し、1981年以来の探鉱の結果、1986年にマスカット西方400キロにあるダリール油田を発見、その後開発を進め、1990年7月から生産を開始していた。生産量は約1万バレル/日。この油田の期限切れに際して、新たな利権協定の実施が行われることとなったのである。

社長の依頼は真剣なものであったが、当時石油業界から離れていた私は、「入札を取り巻く情勢がよく分からない」「ジャペックス・オマーンも当然応札する筈だし、邪魔はしたくない」、「相談をしようと電話をした銀行幹部の友人と連絡がとれなかった」ことなどから、彼の要請に応じることができなかった。後日、彼は中国と組んで、この油田の利権を獲得した。しかも、当時は考えられないほどの高値で競り落としたと聞いた。

「どうする積りだろう」と心配をしていたら、その後原油の価格は急騰し、2008年7月11日にニューヨーク商品市場でWTI原油が147.2ドル/バレルをつけ、彼の会社は大儲けをして、いっそう大きくなった。私もあそこで頑張っただけで一口噛んでいたら、一財産作れたかもしれないと思うと残念な気持ちもする。

それよりも、なによりも悔しかったのは、日本とのつながりに見切りをつけた彼は中国と組み、日本が開発した油田が中国の手に渡ってしまったことである。

アラビア半島の石油利権については、日本が最初に取得したのはサウジアラビアとクウェートにまたがるカフジ油田の利権である。これを成功させた山下太郎は、国内外の種々の困難を克服し、外国勢との戦いに勝ち残り、1957年12月にサウジアラビア政府と1958年6月にクウェート政府と利権協定に漕ぎつけ、1958年2月にアラビア石油を設立した。そして1960年1月に幸運にも一本目の試掘井で原油を掘り当て、一年後の1961年4月にカフジ原油を積んだ第一船が日本に到着した。

これに次いでアブダビで石油利権を獲得したのが、丸善石油、大協石油、日本鉱業が設立したアブダビ石油である。アブダビ政府との交渉に当たったのは、丸善石油の元副社長の杉本茂である。彼が1967年12月に利権協定書の調印に漕ぎつけ、1969年年5月に掘削作業を開始、8月に出油に成功、1973年6月にはムバラス原油の第一船が日本に到着したことは既述した。

続いでアブダビに進出したのが、ジャパン石油開発と合同石油開発である。ジャパン石油開発は1973年に海外石油開発が取得したアブダビ沖合のADMA（アブダビ海洋鉱区会社）利権を継承して上部ザクム油田、ウムアダルク油田、サター油田から各1982年12月、1985年7月、1987年7月に生産を開始し、現在下部ザクム油田の開発・生産作業を進めている。

合同石油開発は、アラブ首長国連邦とカタールの国境線上に位置するエル・ブンドク油田の開発・生産を行っており、1975年11月より商業生産を行っている。

山下太郎が心血を注いで日本で第一番目にアラビア半島で利権を獲得したアラビア石油

は、利権延長交渉に失敗して、2000年2月に利権協定が失効した。

当初この利権延長交渉は順調に進むものと見られていたが、サウジアラビアから鉄道建設への投資を求められてから、風向きが変わって行った。

鉄道の実現性と採算性に懸念を持った日本政府が、サウジアラビアからの鉄道への投資要請を拒否し、代替案として4000億円の投資額と原油輸入量を拡大することなどを提示したのである。ここで、日本とサウジアラビアの対立が表面化した。

あくまでも鉄道建設への投資を求めたサウジアラビアに対して、日本は投資額を6000億円に拡大し、鉄道建設には低利での融資を申し出たが、サウジアラビアはこの提案を拒否した。その後、サウジアラビアは鉄道建設に対して融資ではなく投資を再び求めたが、日本側はこれも拒否。結果として、日本は延長を認められずに貴重な石油利権を失うことになった。

その後の原油価格の高騰を考えると、アラビア石油は莫大な利益を失ってしまった。日本は利権を通じてのサウジアラビアとの深い絆も失い、同国の日本への不信感が残ることとなった。この交渉に前面に出て、誤った判断をした日本の政治家たちの愚は他山の石としたい。

既述の通り、日本はオマーンでも先人が心血を注いで獲得した石油利権を失った。しかも、それがアラビア半島で存在感を増している中国の手に渡ってしまった。サウジアラビアとオマーンでの石油利権喪失は、返す返すも残念なことであった。

11-5. 20年ぶりのクウェート訪問 - 湾岸の先進国

1999年のレバノン投資セミナーで講師を引き受けたことでUNIDO（国際連合工業開発機関）と縁の出来た私は、2002年にUNIDOが派遣した湾岸諸国向けの投資ミッションのアドバイザーを委嘱された。プロジェクトのスポンサーは、中東協力センターで、団長は実施団体のUNIDO職員が務めた。

当初オマーンだけへの派遣と聞いていた私は、漁業関係2社、デーツ関係3社、それに乳香を取り扱う会社をオーガナイズしたが、訪問国は多い方が良いとの中東協力センターの要望で、オマーンのマスカットとサララに加えて、ドバイ、クウェートも訪問することになった。かくして、20年ぶりの私のクウェート訪問が実現した。1982年のイラン・イラク戦争のさ中に、バグダードからタクシーで入って以来の訪問であった。

1990年8月2日未明にイラク軍がクウェートに侵攻し、クウェートがイラクによって占領され、翌1991年2月に始まった湾岸戦争によって解放されたことは既述した。侵攻によってクウェートの街は破壊され、油田は焼かれ、海岸は油にまみれた。イラク兵に殺された人、イラクに連行されて行方不明になった人も大勢いた。その後、イギリスの大学でのクウェート人学生たちとの交流を通じて、私は戦争後のクウェートの状況を一応は把握してはいたが、復興の進み具合が気になっていた。

2002年10月11日夕刻に、私たち一行は経由地のドバイからクウェート空港に到着した。ホテルは、ル・メリディアン。20年前の私の定宿はシェラトンホテルと郊外のリゾート・ホテルであったが、ル・メリディアンはそれらを凌ぐ豪華ホテルであった。市内案内のパンフレットを見ると、ホテルの数も増えていた。

クウェートでの滞在は2日間。訪問や会議の予定がびっしり入っていたので、じっくりと街を見る時間はなかったが、それでも印象に残ることはあった。

第一に、建物が増えていた。ル・メリディアンは私が昔よく歩いたクウェート市の中心部に位置していたが、自分がどこにいるのか分からなかった。新しい建物で街の景色がすっかり変わっていた。ホテルに隣接して、高級感あふれるショッピング・センターが出来ていた。アル・ムタナ・コンプレックスであった。

夕食前とその後に、ショッピング・センターの賑やかな人通りの中を歩いてみた。黒いアバーヤ姿の女性に交じって、濃い化粧を施し、素肌をあらわにした上着とショートスカート姿で歩く若い現地女性の姿も目立った。さすがは湾岸の先進国クウェートだと感じた。

中東では、石油は1908年のイランでの発見を皮切りに、1927年にイラクで発見された。その後湾岸では、1931年にバーレーンで、1938年にはクウェートのガワール油田とサウジアラビアのダンマン油田が発見され、1940年にカタール、1958年にアブダビ、1962年にはオマーンと油田の発見は南下していった。

この石油生産によって、アラビア湾岸諸国は近代文明に初めて遭遇し、町もそれによって近代化した。クウェートは湾岸では早くに石油が発見された国、それ故に真っ先に近代化され、湾岸の中では当時先進的な立場にあった。

翌日忙しい日程の合間を縫って、市北部のクウェート・タワーを訪れた。高さ187メートルの塔であるが、123メートルのところに回転展望台があり、そこからクウェート市が一望できた。印象的だったのは、地上のエレベーター・ホールに展示されていたイラク軍に爆撃された時の写真。生々しい戦争の傷跡。こういう写真は二度と見たくない私は強く思った。新装なったシェラトン・ホテルにも湾岸戦争で焼け落ちた当時の写真が展示されていると聞いたが、そちらは訪れる時間がなかった。

その夜、クウェート一豪華なサフィール・インターナショナル・ホテル内の「慶」に食事に出かけた。「慶」は湾岸では代表的な日本食レストランである。ここは、湾岸での商売で財をなした立志伝中の故人の武藤がアブダビ店に次いで開いた店。当時アブダビ店は閉店していたが、そのアブダビ店の家具類は、既述の通り元々は私がベイルートから運んだものだった。丸善石油の中東駐在事務所で使われていたが、事務所の閉鎖時に「慶」に売却されたという経緯がある。また、武藤の故郷は私と同じ新潟県新発田市ということもあって、親近感を感じた。この時は、お嬢さんが店を切り盛りしていた。店に入ると、広い店内が満席であり、その繁盛ぶりにまず驚いた。見ると、客のほとんどが現地の人々で、しかも寿司を注文している人が多かった。これにも驚いた。こんなことは1970年-80年代では想像もできなかった。値段は安くはない。というより、高い。たしか一人前で

5,000円はしていた。それなのに、この混み様。「クウェート人はやはり金持ちなんだ」と、改めて実感させられたのだった。

11-6. 生命の樹 - アラブ人の生活を支えてきたデーツ

既述のUNIDOの中東ミッションには、デーツの関係会社3社が参加した。うち2社がオマーンのデーツの輸入・販売に特化していた。

それは、1990年代も終わりの頃だったと思う。次女智子の連れ合いである義理の息子が、「表参道駅構内の店でこんなものを見つけました」と袋詰めのを渡してくれた。見ると、クレオパトラの絵ともに「クレオパトラのデーツ」の文字のある袋に詰められたオマーン産のデーツであった。「オマーンのデーツを日本で売る人がいるんだ。珍しい！」と翌日、袋に記入されていた川越の卸売・販売元の会社に電話をした。

その後しばらくして、そのデーツの輸入・販売会社の社長が自宅にやってきた。それが、元運輸省キャリア官僚の新谷だった。彼はオマーンという国は全く知らなかったが、大学の同級生の商社マンから話をもちかけられ、1990年代の終わりから細々と輸入・販売を始めていたということだった。

その縁で私が新谷をUNIDOの中東ミッションに誘い、彼がデーツを卸していた販売会社のまだ20代の社長を誘って2人で参加してくれた。

最近、日本でもデーツが知られるようになり、販売量も徐々に増え続けているが、まだそう馴染みのある食べものではない。ここで、少しデーツのことを説明しておこう。

デーツは、ヤシ科に属するナツメヤシの実である。

ナツメヤシは、北アフリカかペルシャ湾原産とされている。ペルシャ湾原産としている文献もある。寒さには弱いものの乾燥には強く、塩分濃度の濃い砂漠の水でも十分生育する。ナツメヤシは、この地域から東はインド、西はモーリタニアの砂漠へと、そこからさらに気候が適している世界各地に広がった。中国にも1700年前にイランから導入され、カリフォルニアには17世紀にスペイン人によってもたらされたとされている。日本でも沖縄や鹿児島で生育している。

樹高は、25メートルから30メートル。雌の木と雄の木があり、人工受粉が必要であるが、雌の木50本に雄の木1本で足りる。雌の木を受粉させるために、昔の農夫は雄の木の穂からいくつかの穂を引き出して、雌の木に登り、雌の小枝の間に縛りつけていた。いまは、農夫たちが花粉で覆われている穂を集荷場に持って行き、そこで花粉を小麦粉と混合し翌年の必要な時まで冷凍保存し、その後簡単な手動の噴射機を使って吹き付けているようだ。ナツメヤシの木が実を付けるまでの期間は品種によって異なるが、早いものは3年目くらいから実をつける。1本の樹からオマーンでは平均51キロ（2022年）のデーツが収穫される。樹齢は約100年。

ナツメヤシの歴史は古い。メソポタミアや古代エジプトでは紀元前6千年には栽培が行

われていたと考えられ、アラビア東部でも紀元前4千年に栽培されていた考古学的証拠があるという。ナツメヤシは、古代メソポタミアの文学作品であるギルガメシュ叙事詩やクルアーンにも登場する。また、エデンの園の中央に植えられ、「その果実を食べると永遠の命を得る」と聖書に記されている「生命の樹」のモデルは、ナツメヤシだと言われている。

ナツメヤシの実であるデーツは、イラクやアラブ諸国、西は北アフリカまで広い地域で、古くから重要な食物とされてきた。イスラーム諸国では伝統的にラマダン期間中の日没後、牛乳と共に最初に採る食べ物である。アラビア・コーヒー（カフワ）とデーツは長い間にわたって伝統的なアラビアン・ホスピタリティの一部をなし、今日にいたっている。来客時やいかなる集会に欠くことのできないデーツはアラブ文化そのものと言える。

砂漠で遊牧生活を送るベドウィンたちは、伝統的に乾燥させたデーツと乳製品を主食としてきた。私が砂漠の民ベドウィンと満天の星を仰ぎ見ながら焚き火を囲んで夜を過ごす時には、夜の話しになる。その時「俺はデーツを食べて、ラクダのミルクを飲んでから強い」というのが彼等の定番の主張であった。私は、日本でデーツの説明をする時には、「彼等はデーツとラクダのミルクで何千年も砂漠の中で歴史をつないできたのだ」と話している。

デーツは長さ2, 3センチの円筒形、中に種子がある。アラブでは、生食用と乾果の両方が売られているが、日本で市販されているのは、乾燥させたものである。ドライフルーツとしての見た目は、プルーンによく似ている。

上述の「クレオパトラのデーツ」として販売されているオマーン産のデーツのパンフレットには、「デーツには鉄分はじめミネラル、ビタミン、食物繊維がいっぱい。干し柿、黒砂糖の味、甘くておいしいけど太らない。アメリカ、ヨーロッパでは天然の美容食健康食で人気上昇中」、「お茶やコーヒーの時のお菓子代わりに。ビールやウイスキーのおつまみに。子供のおやつに。急ぎのとき、疲れたときやスポーツ、ダイエットのときのエネルギー補給に」とある。

因みに、デーツ可食部分100グラム当たり、エネルギーは354キロカロリー、植物繊維8.3グラムと天然糖分（果糖+葡萄糖）65.1グラムとある。脂肪分はほとんど0。たんぱく質2.2グラム、カリウム、ナトリウム、マグネシウム、カルシウム、燐、鉄、銅、亜鉛など9種のミネラルとA効力、カロチン、B1、B2、ナイアシンなど5種類のビタミンを含むとある。実に栄養価の高い食べ物である。一方、プルーンはデーツと同程度の栄養価があるが、カルシウムに限って言えば、デーツにはプルーンの1.8倍の含有量がある。

デーツから作られる食品としては、デーツシロップがある。料理に使われたり、そのまま食べられたりまたはパンに塗ったりされる。酢、ワインやアルコールもデーツから作られる。ただ、ムスリムの国では、後の2つの製品は作られていない。木随から作られるナツメヤシ粉、サラダとして食べる木の中心部、種からとる油、種の中身は、すりつぶして何日も水に浸けて動物の餌にする。また、種はつないで首飾りになる。種油は石鹼の製造

に用いられる。デーツが、いかに現地の人々の生活に密着しているかがよくわかる。

デーツケーキも、ヨーロッパでは有名である。日本では、お好み焼き用のオタフクソースに、とろみやうまみを出すために50年ほど前からデーツが使われている。ちなみに、オタフクソースのホームページには、デーツケーキも含めた16種類のデーツを用いたレシピが掲載されている。

ナツメヤシの葉は、帽子、敷物や仕切り布、籠、団扇などに、繊維質部分はボートの縫い糸や索具に、葉の主脈は塀や屋根に使われる。幹は板に切断されてドアや梁、たるきに使われれたり、燃料としても用いられる。また、デーツ林の中に野菜やトウモロコシ、アワなどの穀物が栽培されている。この場合、デーツ林が防風林の役割を果たしているのである

私もアラビア半島やイラク・イランなどの周辺地区でいろいろのデーツ林を見てきた。オマーンでの典型的な景色は、山の頂きの砦、麓に広がるデーツ林、側を流れるワジ、林の中で見え隠れする部落の3点セットであろう。

オマーンではナツメヤシは主としてナハル、ニズワ、ルスタック、スマイル、イズキ、ファンジャヤブライミーなどの内陸山間部に生育する。

オマーンのデーツのうち、カラス、カサブ、ザバド、マドルキア・カッシュ・カンタラなどは、国際市場でも最上のデーツと評価されている。オマーンで処理され、食用に加工されているデーツの種類は、カサブ、ハンザル、ムサンダムやカサブ・カッシュ・ハバッシュなどがある。オマーンでは、200種以上のデーツがあるとされている。

世界の主要なデーツの生産国は2021年では、トップはエジプトで175万トン、次いでサウジアラビアの157万トン、イランの130万トン、アルジェリアの119万トン、イラクの75万トン、パキスタンの53万トン、スーダンの46万トン、オマーンの37万トン、UAEの35万トン、チュニジアの34.5万トンとなっている。

主な文献：

「シリアとレバノン」(小山茂樹、東洋経済新報社、1996年)

「アラブの歴史」(フィリップ・K・ヒッテイ著、岩永博訳、講談社、1990年)

「デーツ」(ジョハンナ・パーフィット&スーザン・バレンタイン著、オマーン・ロヤ出版、1995年)